

岩本論文へのコメント

山 科 満

岩本氏は一貫して、発達障害傾向を有する人の「自己」の発達に関する研究を続けてきた。その中で本論文は新たな展開に向けた研究ノートの試論といえる。氏の一連の研究の根底には、発達障害傾向を有する人の就労継続には本人の主体的・自律的自己の確立が必須な要素であるという、当事者研究の第一人者ならではの強い思いがある。研究者としての氏の最終目標は、自己の発達を促進するための介入プログラムの開発にあり、それゆえに個別性の極めて高いこの領域において、個人の独自の発達の過程を捉えることができるとされるダイナミック・システムズ・アプローチ (DSA) に期待を寄せるのは自然な流れであろう。

岩本 (2019) は、発達障害傾向を有する人の就労場面における2次障害の防止のためには、自己理解の促進が鍵になることを指摘している。中でも、発達障害傾向の人の自己の発達プロセスが定型発達とは大きく異なり「人の内的な情動や心に関する記憶の積み重ねが圧倒的に少ないまま」自己概念が形成されているため、メンタライジングすなわち「自己と他者の精神状態に注意を向けること」の経験の積み重ねが必要であることを強調した。さらに、自身の当事者体験として、メンタライジングの果てに「自己と他者の価値観のすりあわせをしていたある瞬間に、リアルな自己感が立ち上がった」という経験が述べられている。そのような体験を踏まえて、岩本 (2019) は発達障害傾向を有する人がメンタライジングのスキルを効率よく身につける方法を探ることを問題設定していた。本論文はその論考の延長にあり、発達障害傾向を有する人の就労支援の考え方について、未だ確立されていない統一的な原理原則を見いだしたいという研究者ならではの問題意識が表明されている。

しかし、青年期・成人期に至った人の発達過程を、多岐にわたる要素とそれらの交互作用、さらには過程における創発性を織り込んで量的に解析することは至難の業であるに違いない。それもあってか、DSAに基づく実証研究は現状では必ずしも広がりを見せているわけではない。氏が引用している文献の中には青年期の心理過程を研究テーマとしたものもあるが、複雑であるはずの心理過程がシンプルに群分けされ比較検討されるなど、DSAを用いるメリットを生かし切れていないものも散見される。青年期の発達研究において個別性と内実性を重視している白井 (2016) も、DSAに対する期待を表明しているが、その後の展開を見る限り熟練の研究者といえども未だDSAを咀嚼し切れていないという印象を抱かせる。それゆえ岩本氏も、「暫定的にでも1事例をもとに理論モデル化を行う」ことから始めざるをえないのである。

言い換えれば、研究の現状は、まずは思考の枠組み・理念としてのDSAに立脚し、1つ1つの事例をていねいに記述していく段階にあると思われる。氏の体験に基づくメンタライジング発達モデルは、これまでの岩本氏の一連の論文を読み込んできた立場からは、妥当なモデルであると思われる。ただし、注意制御機能の向上に薬物は寄与するが、そこには自己制御にまつわる成功体験から自己効力感の向上による好循環といった心理過程が関与していたはずであり、さらなる精緻化が可能であろう。その点も含め、まずは大学生を対象として縦断的な聞き取り調査を行い、発達神経生物学との整合性を意識しつつ質的分析を深めていくことが課題であると思われる。氏の研究の発展に期待したい。